

オレンジ色のぬるい水が肺を満たしていく。放課後の教室に張りつめた液体は重くて、なのは窒息しそうだった。肋骨と横隔膜が潰れて、上手く呼吸が出来ない。先生の息遣いと自分の心音が二つの机越しに不協和音を奏で、今すぐ頭を抱えて飛び出したかった。足の先がむずむずする。のしかかる水圧が重い。

「お母さんは急用で来られなくなっちゃった・・かあ。

そっかあ・・・。」

ベテランの女性教師はそう零すと、唇を引き結んで手にした黒革の手帳を開いた。なのはそのトップコートだけが施された爪先を眺め、端切れ悪く肯く。水を飲み込み続ける口では上手く発音出来るわけもなく、先生の顔も見えなかった。「そうねえ。」

ベージュに近い口紅が引かれた唇の右端が僅かに歪む。困った時の先生の癖だ。その表情を、訝しんでいる時にもすることを、なのは知っている。

校庭から部活の歓声が響いた。

「ちよっと時間もあるし、せつかくだから先生と少し話そっか。また日取りは決め直せば良いし。」

机の盤上に西日が溜まっている。じつとその塊を睨みつけていると目の中に気持ち悪い模様が浮かんだ。そこから頭の中が浸食されるのをどこかで願っているみたいに、なのは目を逸らさなかった。視界の隅に入り込む黒板も、窓も、誰も座らない右隣の席も、他の机を後方に片付けた為の空白も、中等部一年C組の全てを、今この時は脳内から排除したい。

この時間が圧縮されて、すぐに無くなってしまうように。

「高町さんは進学希望じゃない——で、よかったのよね？」

す、っと。なのは息を吸った。

ゆっくりと顔を上げる。先生の仕立ての良いスーツ、グレーのシャツ、首を渡って最後、その両眼を見据える。その彼女の睫の上に薄らと夕日が載っていた。

日差しがなのはの横顔を焼いた。

「ええ、私は——。」

なのはの喉が音を紡ぐ。

その時、教室の引き戸がゆっくりと開かれた。

心臓が早鐘みたいだ。息がぶつ切りになる、太腿もふくらはぎもつりそうなくらいに痛い。体が重たい。跳躍のリズムに合わせて意識がぶれる。

でも、いける。

「66、67、68っ、」

頭の上を跨ぎ、蹴り上がった足の下をくぐり、背中を過つて体の周りを回る縄跳びの音色は一定だ。大台が近い、昨日の夜、夢にまで見た大台だ。

「はやてちゃん、がんばって！」

近頃、一緒に練習をしている小学生の女の子が手を叩いて応援してくれる。はやては一度彼女を見遣って口許を緩めると、息を強く吐いた。後少し。縄跳びが公園の景色を霞ませる。

「77、78、79、」

足元で小石が跳ねる。ローファーの中で親指がぐつと丸くなる。荒くなった息に削られた喉が少し軋む。ちらりと見上げた空は赤く染まり出していた。もうじき、五時を告げる町内放送が響く。だからこれが、今日のラストチャンスだ。

「86、87、88、」

「すごい、今までで一ばんだよ！あとちよつと！」

胸を突き破りそうな心臓の鼓動は、もう違うリズムでなっている。期待がかき鳴らす、力強い音だ。はやての声の調子も上がる。目標まで、あとちよつと。

「93、94、95っ、」

疲れの滲んだ手首で縄を繰り、疲労の溜まった足で地を蹴

る。そう、あの日、彼女と約束した三桁の栄光へと、はやては飛び上がる。

「99、ひゃー」

「お母さんのバカああああああああああああああ！！」

地面をひっくり返す程の絶叫が、夕暮れの公園を吹き飛ばした。自分の腹まで痛みそうな、渾身の怒鳴り声だ。百回目の縄がはやてのローファーにぶつかって、ばちん、と乾いた音を立てた。

「・・・あ。」

疲労に絡めとられた足が地面と引つ付く。重力を思い出せば、はやてと大地の呪縛は固い。はやては足に巻き付く縄と、長く伸びる自分の影を見下ろした。

「もう、ほんつと、お母さん信じらんない！」

どうしていつもいつもやめなさいとしか言わないの！？

ぜんっぜん、意味わかんない！」

怒鳴り散らしながら、彼女は入り口の車止めを避けて、公園を脇目も振らず突っ切ってくる。半開きの指定靴から体操服がはみ出して、ぐつたりと垂れ下がっていた。彼女の顔は太陽を浴びて、真っ赤に焦げている。

「ねえ、ほんと、フェイトちゃん聞いてよ！」

フェイトちゃんつてば！」

高町なのははそう叫ぶと、はやての腕を掴んで全力で睨みつけた。いつもより一層感情的なのはの双眸が、ぼかんと

口を開いたままのはやての両目を映す。

冷たい夜風に、夕飯の匂いが乗っている。

「あれ、フェイトちゃんじゃない。」

はやては目を瞑ると、一呼吸を置いた。荒い呼吸が暗闇の中で弾ける。そうして、全身を包む疲労感を吹き飛ばすように、はやては目蓋を光の速さで見開いた。

「いい加減にせえや!!」

五時を告げる町内放送が、近くの鉄塔から鳴り響いた。

「で・・・。」

上空を群れをなす鳥達が西へと飛び去って行く。町内放送の残響も、その空に靡く緋色の雲に吞まれて消えた。子供達の足跡も擦れ、見下ろす街並には青く陰が伸び始めている。

「何なん？」

縄跳びのプラスチックの柄を弄るも、はやては口調に不機嫌さが滲むのを隠しきれなかった。端々に刺が立って、自分の頬にも突き刺さる。

「あ・・・、うん。」

はやてちゃん、いつもここで縄跳びの練習してるの？」

背後、夜の溜まり始めた路地から吹いた風が、なのはのサイドテールを揺らした。中学に入る少し前に変化したその髪型は、目に馴染んで久しい。肩口を掠めて、毛先が遊ぶ。

「いや、私の質問に先に答えてくれへん？」

人の大記録を勘違いで粉碎しよってからに。」

その風は、はやての前髪も吹き散らした。潜む冷たさが額

に触れ、スカートのプリーツが僅かに広がった。植木の白樺が囁くのが聞こえる。

「あ、その、ごめんね。なんかよく見えなかったから。」

それに、フェイトちゃんもよくこの公園で小さい子と遊んでるから、つい。」

木々が大合唱を起こした。銃声のように葉擦れが降る。枯れた落ち葉は足元を転がり去りながら、強くはやての背を揺らした。

「まあ、誰そ彼、つちゆう時間やからなあ。」

やつぱり、知ってたんだ、と。独りよがりな感情をはやては奥歯で噛み砕いた。ただ掌についた汗と砂が不愉快で、はやては柄をまとめ、縄跳びを縛り始める。

「それにはやてちゃん、中学生になつてからいきなり背が伸びちゃって、フェイトちゃんとあんまり変わんないし。」  
結び目を引つ張ると、ビニール製の縄跳びが一声鳴いた。腕を引き延ばしたまま、はやては半眼で視線をくれる。

「だから、私の大記録樹立を叩き折つたのも仕方ない。」  
肩を跳ねさせ、なのはが慌てて両手をばたばたと振つた。

「そ、そんなことないよ！」

本当にごめんね。はやてちゃん。」

はやては鼻から嘆息を漏らすと、縄跳びをぶら下げた手を垂らす。芯の無い軽い柄がぶつかり合うと、乾いた音を立てた。

「それで、なに？ お母さんとまた喧嘩しよったん？ 今日、三者面談やったっけ？」

なのはの眉間に薄らと皺が寄った。そのまま愛嬌たつぷりに舌を覗かせる。

「あ、ばれた？ もうお母さんと言ひ合いになっちゃって、教室飛び出して来ちゃった。」

軽い声が辺りを跳ねて回る。なのはの鞆からはみ出たままの体操着が何かを訴えたいのか、ぺろっと袖を一つ垂らした小さく振れるその半袖を眺め、はやては風に乱された髪を撫でた。

「まあ、めっちゃや叫んでたしな。」

風が出始めていた。うねるような木々の声が、街の音が四方から巻き上がる。螺旋を描いて空へと。

「前から話してるのに全然言うこと変わらないんだもん、お母さんってば。管理局なんてやめなさい、そんなに行きたくっても、高校や大学行ってからでいいじゃないって。」

足で地面を掴み、なのはは立っている。黒く染まり出した影が身長何倍もの長さになり、砂の上に歪に流れていた。

「そら、・・・なあ。心配してくれとるんやろ。」

お母さんなんかから。続きの言葉は喉の奥のまま、胃に落ちた。

「それは、わかってるよ。」

顰められた柳眉をはやては横目に見る。その話を彼女にすらつもりだったんだ、と体内で反響する声は散乱し、幾重にも折り重なる。困ったように微笑んで返事をするであろう彼女が底の方にぼうつと浮かんだ。

「あーあ、でもまさか、縄跳びしてるのがはやてちゃんだな

んて。」

わざとらしい仕草で、なのはが顎に探偵のごとく手を当てた。

「私もまさか、フェイトちゃんに間違われる日が来るとは思ってもよみませんでしたよ、ええ。」

この三流め、とばかりに嫌味つたらしく、はやては顔を歪に変形させてみせる。途端になのはの眉毛が四十五度の大傾斜を付けた。

「いや、その・・・フェイトちゃん今日のお仕事、夕方には終わるって言ってたし、そうしたら縄跳びするって話だったから、ね。」

とびきり引き攣ったとびきりの愛想笑いがなのはの顔を覆っている。額には鈍い汗の染みが浮かんだ。

「でもなんか、えっと・・・お仕事伸びてるみたいだね。」

こめつきばったのごとくしきりに頷くなのはに、はやては小さくため息を零した。その端が僅かに白く濁る。空気が冷たい。

「せやね。誰か捕まえる、って言うてたし、しんどいやろ。全部、予定通りになんて。」

なのはは小さく肯定する。

「うん、そうだよ。けど、フェイトちゃんならきつとうまく行くよ。ね！」

言い放つと、なのははにっこりと笑った。はやては口角を持ち上げて、一息笑い返す。

「それにしてもはやてちゃん、この公園知ってたんだね。学

校からも結構距離あるのに。」

なのは顔が肩越しに来た道を振り返る。学校は街の中でも高台にあるが、ここからだてアパートや電信柱の影になって見えなかった。西を向く壁だけが、鏡のように太陽を反射している。

「私の家、こっから歩いて十分くらいやよ。なのはちゃんがかっこ通って来ることあらへんから、知らんかっただけで。」

吐く息すら真紅に染まりそうな夕焼けだ。はやては自分の掌を見下ろして、長く落ちる指の陰を転がす。

「その道、まあっすぐ行くとうちの前の道に出るんよ。」

太陽が焼け残る街並に沈んで行く。はやては横目に、その最後の灯火を焼き付ける。鈍い模様が網膜に浮かんだ。

「そっかあ、けどちょっと意外かな。はやてちゃんが公園で、女の子と一緒に遊んでる、なーんて。」

なのは口角をにっこり持ち上げて、はやてを見つめた。街灯がポツポツと灯り始め、家々の窓から淡い光が漏れている。その薄闇の中、なのはには太陽の輝きが差し込んでいた。

「フェイトちゃんとも、一緒にやってるの？」

なのはの背後、公園のたった一つの入り口が見える。そこには黄色の車止めが三つ並んで、表面を残留に染めていた。はやては目を瞑ると唇に、一本笑みを引く。

「さあ、どうやろうか。フェイトちゃんとスパー仲良しさんのなのはちゃんは、みーんな知ってるんちゃうの？」  
そうやって歯を剥いて見せると、なのはは戦慄く唇をぎゅ

うつと潰した。

「うん、知ってる知ってる。確認しただけだもーん。」

白々しい演技が可笑しくって、はやてはころころ笑い声を上げた。落ち葉もからから談笑を交わしながら、はやての傍を歩き去って行く。

ブランコと滑り台、砂場と、子供がボール遊びをするくらいスペースがあるだけの、近所の子供くらいしか来ない小さな公園。その入り口には車止めがあつて車椅子では入れないから、一度も来たことは無かった。中学生になって、公園に行く理由もなくなつて、そして。

はやては自分のローファーを見下ろすと、足元の砂を踏みしめた。硬い砂粒の感触に、自然と頬が緩んでいく。

「ところで、ねえ？ 大記録つてもしかして、30とか・じゃ、ないよね？」

かばんを肩にかけ直し、なのはが神妙な面持ちではやてを覗き込んだ。口角を引き上げると、はやてはにやあ、と笑う。「今日の記録は、99回やで。なのはちゃん。」

なのはの喉を唾液が滑って行くのが、まるで目に見えるかのようにだった。鈍い音を喉仏から響かせて、なのはは目と口を見開いた。そして。

「うわあああああつ！ はやてちゃんに負けたあああつ！」  
悲鳴と共に、なのはは頭上を仰いだ。

見上げた西の空に、金星が現れている。

紅の光条が頬を焼いた。

朝焼けが、始まっている。

「はっ、はっ。」

胸倉を握り締め、フェイトは路地裏でぎゅっと唇を噛み締めた。完全に深追いだ、そんなことは解っている。たった一人でここまで来てしまったことも判っている。班の誰一人、フェイトの多重次元転移に最後までついて来られないことを知っていた。次元航行船からの追跡を振り切れるというのは、そういうことだ。

「く、そっ……。はあっ……。」

無理をし過ぎた、というのと同時に解っていた。心臓のあたりを握り潰されているかのよう錯覚する。杭が打ち込まれているみたいだ。重圧と脱力感が汗を噴き出させる。壁にもたれかかる背を、引き剥がすことが出来ない。

<< Sir, there are not any responses corresponding to

what we seek. >>

胸ポケットの中から、くぐもった合成音が漏れた。フェイトは執務官服ごとバルディッシュを握ると、足に力を込める。「うん……。でも、この世界に居ることは確実なんだ。」

額から滲んだ汗が、鼻の脇を伝って唇に染みる。塩辛さに、フェイトは顔を蹙めた。こういう時程、バリアジャケットに如何に守られているかを痛感する。関節すらねじ切れそうな痛みは、逃すまいと強引に次元を超えた付けど。だが、バリアジャケットに換装する時間すら惜しかったのだ。

絶対に、彼女は今日、捕まえなければならぬ。

海は広い。この場を逃がして、もう一度見つけられる確証はない。何より、彼女を許すことは出来ない。

「バルディッシュは通信回線の復旧と現在地の確認を。」

夜の青が押しやられ、天球に光が満ち始めていた。黄金が天を満たす透けるような水色と溶け合う。もう夜明けを迎えようとしている。じきに通りには人が増えるだろう。フェイト一人で、彼女の確保も境界の維持も行うのは難しい。人を巻き込む可能性を低く留める為には、それまでが勝負だ。

フェイトは唾液を嚥下する。硬い感触が食道につつかえながら、体を下る。狂っていた心臓のトーンが一段下がった。

「私は、あの人を見つめる。」

フェイトは右の拳を中空で振り抜いた。金色の閃光が迸り、虚空から掌中へ漆黒の戦斧が顕現する。何者にも侵されないその光沢の上を、雷光が駆けた。電子音が短く答える。

<< Yes, sir. >>

純白の外套が弾け広がった。

鳥の音が遠く木霊する。夜明けの声に、フェイトはふ、と息を細めた。こめかみと背中を伝う汗の粒を鮮明に感じる。足を、体を、額を風が走り抜ける。低いコンクリート製の建築物の狭間、いつ降った雨かも、誰かが垂れ流したかも判らない汚水が溜まる窪みにすら、燃える空が焼き付こうとしていた。映り込む自分の影はわずかに暗い。

目を閉じた。視野を覆う色彩の混濁の中、胸の奥底から沸き起こるものが在る。確かな手触りを持ったその熱を、組み替え、形作って行く。次第に膨らみ体を満たすその力を、フ

エイトは呼気と共に解き放つ。

広域探索魔法が足元から空へと突き抜けた。立ち上がった光の尖塔は大気に溶け、街並を飲み込み音も無く四方へと広がって行く。

音を、フェイトは探していた。魔力の奏でるあの高い音だ。彼女は魔導師ではあるが、先刻の拠点制圧時の攻防からこれ程の多重次元転移を行う能力がないことは判っている。必ず、エネルギー結晶か古代遺失物か、なにか魔法補助をする装置を持っているはずだ。そのような物を探し出すことは、魔法を使用していない人間を探し出すのに比べれば難しくない。ましてや、今は次元転移を連続で行うという高負荷を掛けた直後だ。残留魔力がある。

意識が街を覆っていく。通りを幾本も越え、家々を包み、探索魔法は拡大する。呼気を抑え、意識を澄ますと共に、フェイトは自らの魔力のぶれを滑らかにしていく。水面に寄るさざ波の音を聞き分けるように。静けさの中へ己を投じる。真っ白の間隙に。

硝子が触れ合う程の微かな音が耳元を掠めた。

「見つけた。」

フェイトは目蓋を押し開く。赤い瞳に蜂蜜色の光が差し込んできた。空では月がゆっくりと青く溶け始めている。

絶対に、捕まえてみせる。

奥歯を噛み締めると、フェイトは勢いよく地面を蹴った。

太陽の方角に3キロメートル。走っている時間は無い。建屋に挟まれた狭い空へと、魔法を使って加速する。風を切り裂

いて屋根より高く跳ね上がった。

金色の光が、左目に突き刺さった。半身を現した太陽が放つ光の矢だ。その真紅の姿に掛かる雲は溶銅の輝きを放ち、街も遠い山並みをも焼き払う。未舗装の道路が巻き上げる土の粒子も反射して、小さな街は一回り大きく膨らんでいる。フェイトは天頂を仰いだ。体に力を込め、その薄青い空へと急上昇する。風が頬を切る。

「< Sir, I've still not connected with any bases. >>

最も低いけぶるような雨雲を抜けた。より小さく、人の判別も付かなくなった街の景色を見下ろし、フェイトは手短かに頷く。

「そのまま、繋がるまでお願い。」

刹那、フェイトは弾丸となって、太陽の方角、街の外れに急降下する。翻る外套のけたたましい叫びを置き去りに、反応を見つけた場所へと一直線に駆け下りる。

ここが、管理外世界である公算は高い。そうでなければ通信回復に何分もかかるとは考え難いからだ。そうである以上、誰も巻き込まず、見られずに成し遂げてこそ成功だ。フェイトは先程より指向性を持って前方へと探索魔法を飛ばす。出力を抑え、自分が彼女の居場所に気付いたと悟らせないように、迫る建物の群れの間へと確信を持って走らせる。屋上に立つ看板を外套が掠めた。

彼女は遺跡から古代遺失物の盗掘を繰り返す実行犯の一人だ。犯行の多くに、子供を使っている。古代遺失物の多くは発掘時にはその効果、発動条件が不明であり、通常は適切に

封印を出来る魔導師によって初めて、作業の安全が確保される。その過程を飛ばす為に、子供を使うのだ。数少ない古代遺失物を適切に封印出来る魔導師を用意するのは、容易ではない。そのために、子供にどんなリスクと被害を与えようとも。

「……っ。」

壁のように魔力を前方へ放ち、フェイトは中空で大減速をした。建物の屋上と同じ高さを十数メートル滑り、細い路地の上で止まる。太陽とは垂直に伸びる路地だ。左右を十五メートル程度の高さのビルに囲まれた幅二メートル程のその路地には影が落ち、勝手口やゴミ箱等が並ぶため見通しが利かない。フェイトは顎を引き、路地を睨むと垂直に下降する。太陽が視界の端に見えた。空が浅葱色に染まっている。

微かな衣擦れの音だけを立て、フェイトは地面に足を下ろした。路地の先は交差する道が幾本も連なり、光のカーテンが何枚も引かれている。

距離は、もう五十メートルも無い。

息を引き絞り、バルディッシュを右手で握り締めると、フェイトは未だぬかるんだ路地を、一歩ずつ刻み始めた。

先刻の拠点制圧で、多くの子供を保護していた。怪我をしている子も多く、中には四肢が大きく損傷している子も居た。皆一様に顔を強ばらせ、唇を引き結ぶばかりの子達だ。二ヶ月前保護した男の子もそうだ。三つか四つなのに監禁され、実験動物のように扱われ続けた為に、まだ言葉も戻らない。名前さえ、判らないでいる。

握り締めた左の拳が、手甲を嘶かせる。フェイトは奥歯を噛み締めると、渾身の力で道の先を睥睨する。

あの子達の笑顔を見たい、取り戻したい、そう思う。あの男の子の、燃えるような赤い髪と榛の瞳が光を持って輝くのを見たいと。

「私は、それを——」

吹きかけた言葉を飲み込むと、フェイトは鋭く息を吐き出した。暗闇の奥に何かの影が、現れようとしている。

自動ドアが開くと、間の抜けたチャイムの音が店内に響き渡った。外の薄暗さに慣れ始めた目には、コンビニの光は一層眩しい。

「いらっしやいませー。」

カウンターで青いストライプの制服を着た女性が、こちらを見て応じる。はやてはなんとなく会釈をすると、なのについてカウンターの在る列、お菓子のコーナーへと歩を進める。店員は彼女一人で、他の客は雑誌コーナーで立ち読みをしているダウンジャケットの男性だけだった。彼の姿も、自分の姿もぼんやりとした輪郭となつて、ガラスに写し取られている。外、住宅街の通りは青く染まり、海の中をガラスケースで旅しているみたいだ。

「あ、はやてちゃん、メルティークィスでてるよ！」

なののは肩がはやてを小突いた。んー、と答え、はやてはなののは肩を寄せて振り返る。両手に収まる程のシックなカ



ラーリングの箱、その表面に描かれているのはココアでコーティングされた四角いチョコレートだ。

「もう今年の出たんや。買いやね、買い。」

ココアのやわらかさと、口の中でなめらかに溶けるほろ甘さが蘇る。冬期限定のこのチョコレートは毎年の要チェック商品だ。

「せやけど、ほんまに今からミッドチルダ行くん？ まだ、フェイトちゃんの仕事終わってって連絡、ないんやろ。」

マカダミアナッツの入ったチョコレートを二つはやては取り上げた。紅白と金色で異なるパッケージは違う会社の商品である証だ。

「家出は開心せえへんよ？」

どつちにするか悩んで、はやてはとりあえず両方をなのが提げるかごに突っ込んだ。

「ちゃんと、家に連絡はするよ。でも、お母さんの顔、あんまりみたくないだもん。また喧嘩しそうで。」

なのは手が、買い物かごに入ったマカダミアナッツ入りチョコレートのうち、赤色の方を取り出した。

「それに、あんまり遅くなるとフェイトちゃん、こつちには帰って来ないかもしれないし。」

歯切れ悪く続けると、なのは手にしていたチョコレートの箱をはやての手の上に置いた。

「二つは要りません。こつちは戻して。」

真剣な眼差しでなのははやてを見据える。はやては思わず半身を引くと、しぶしぶ棚へと戻した。傍に並ぶ板チョコ

やコアラのマーチなどを改めて眺める。

「ねえ、はやてちゃんは三者面談で、なんて答えたの？」

プリンブルズのサワークリーム&オニオンとテキサス・バーベキュー味を手にとって、なのは見比べていた。蛍光灯の真つ白い光に、なのは髪色は濃く見える。頬にサイドテールが触れていた。

「進路？ 親戚と一緒に、外国に行くと思います、って言う」といたよ。シヤマルが来てくれとつたし。」

ふーん、と気のない返事なのは唇から漏れた。手の中でのくるとプリンブルズを回し、なのは結局、サワークリーム&オニオンの緑の缶をかごに納める。

はやては袋入りのあめへと視線を移した。定番のど飴からミルクィー、その他かき氷味など十種類程がホルダーに掛けられている。

「なのはちゃんは何んて言うたの？」

まさか魔法使いになります、とは言えへんやろ。」

そう尋ねた瞬間、濁流のごとく盛大なため息が、なのはから吹き出された。肩が地盤沈下を起こし、首が転げる。

「え・・・？」

はやては思わず顔を引き寄せた。店の自動ドアが開き、チャイムとともに誰かが入ってる気配と、店員のいらっしやいませー、が聞こえる。

「進学はしません、就職します、って言った。」

自らを落ち着かせるように目を閉じるなのは眉は、心臓破りの坂かと思わせる程に吊り上がっていた。

「それは、まあ……素直な返事やねえ……。」  
私立女子中学校の普通科卒で就職なんて、大学に行くよりも難しいやろ——三者面談の紛糾ぶりが容易に想像出来て、はやては額に拳を当てた。

「管理局で働きたいっていうのは、本当だから。」

続いたのは、落ち着いた声音だった。はやては顔を上げ、雑誌を立ち読みしていた男性がお弁当をレジに持って行くのを眺めた。もう一人の客は飲み物コーナーでカップのコーヒーを選んでる。

なのはフランのノワールを手を取った。

「私、それはホワイトチョコのやつがええな。」

気付いて声を掛けると、なのはは肩を揺らして、隣に並んでいたホワイトチョコの方を取り上げた。

「何か、あめも買つてく？」

お菓子ばかりが入った買い物かごを手に、なのはがはやての元に歩み寄る。はやてはミルク味のあめを一袋ホルダーから外してかごに入れた。プリンダグズの上に、白い袋が横たわる。

「こんなもんでええんちゃうかな。」

チョコレート菓子三つにポテトチップス一つとあめ一つは偏っている気もしたが、なのははすんなりと頷いた。

「じゃあ、とりあえず私が払って来ちゃうね。」

「お願いするわ。」

はやての横を通り抜けて、なのはがレジへと向かう。はやては店の奥、ペットボトル飲料が並ぶ冷蔵庫へと回り、ぐる

っと店内を歩いた。白い床には方々からの明かりの為に臙な影が足の裏につくだけだ。雑誌コーナーは時間帯の問題か、やや商品に欠けがある。読み回された週刊誌の表紙が捲れ、棚との間で折れていた。

ガラスの外は、店に入ったときより暗い。太陽の残照も冷め、通りの反対側にある電柱が青黒く霞んでいる。家のシルエントは塗り潰されて、漏れる橙色の灯りばかりが大きく膨らんで見えた。それらを透かすガラスの上に、自分の顔が流れ込んでる。前より少し、大人びた顔をしている、そんな気がした。一人だけ早く、背が伸びているからかも知れない。

「はーやてちゃん、行こう。」

ビニル袋を提げたなのはが、ガラスの中のはやてに手を振った。レジから出口へと歩くなのはへとはやては振り返る。ほんの少しだけ、今ははやての方が背が高い。

「せやね。しかし、お菓子が夕飯代わりか。」

並んで自動ドアをくぐると、後ろから店員さんの声が二人の背を追いかけた。街並は夜に沈み、東の空だけが真っ青に染まっている。もう何歩か進むうちに、その青さすら消えてしまふのだろう。天球を包む青空の残り火はゆつくりと静まろうとしている。

細い月が白く輝いていた。

「あーあ、でも、明日からどうしょ。」

ビニル袋を大きく振り、なのはが頭上を仰いだ。

「短気は損気やねえ、ほんまに。」

お母さんからメールとか来てないん？」

覗き込むと、なのははあからさまに顔を背けた。そうして、消え入りそうに呟く。

「メール、開いてない。」

バツが悪そうに、道路の隅に視線を投げ捨てているのはののの背中に、はやてはため息を零した。

「なのはちゃん、あんなあ・・・、お母さんそんな心配させたらあかんとちゃうん？ 連絡ちゃんとせえへんのやったら、一緒に行かへんよ。」

背中を覗んでいると、なのはは大きく肩で息を吐いた。項垂れると、肩口をサイドテールが滑り落ちる。

「わかってるよ。」

私は、お母さんもお父さんも納得させて行かないといけななんだ、って。」

制服の上着に付いたポケットへ、なのはは左手を入れた。

三連の星を模したストラップが青く光を反射させる。掌中に収まった折りたたみ式携帯電話のサブディスプレイが緑に発光していた。

「はあ、でも、気が重いなあ。」

自分のせいやろ、という言葉を我慢して、はやては辺りを見渡した。街灯が点く一つ先の電信柱まで、先程よりもワンテンポ遅く進む。

「まったく・・・なんて言って飛び出して来たんだか。」

液晶のバックライトに照らされて、なのはの頬が白い。左手だけで器用にメールを打ちながら、なのはの目ははやての方を僅かに向いた。

「中卒で就職して何がしたいの？ って先生が訊くの。」

上手い誤摩化し方準備してたつもりなんだけど、なんかお母さんにまでいろいろ言われてたら、ゼーんぜん判んなくなっちゃって。」

キーの中心にある丸い大きなボタンを押すと、なのはの指が止まる。画面を見つめながら、なのはは紡いだ。

「上手く答えられなかったんだ。」

人差し指で携帯電話を折り畳むと、今度はそれを半開きの鞆に押し込んだ。フラスナーも閉め鞆を担ぎ直すと、気を取り直したように大きな一歩を踏み出した。

「そら・・・、答えんの難しいかも知れんなあ。」

足の先が電信柱に付いた街灯が作る円の中に入る。色彩を失ってもなお、ローファーは濡れたように光沢を垂らした。

「それでね、先生が質問を変えたの。」

あなたは何になりたいの、って。」

はやては黙って、なのはのこゝろを見つめた。蛍光灯の安っぽい明かりに照らされて、なのはの頬には濃く陰影が落ちる。睫に滲む光がわずか、瞬いた。唇が笑みすら含んで開く。

「何にも負けない人になりたいです、って答えたんだ。」

夜風が二人の髪を掻きあげ、木々のざわめきごと浚って、背後へと流れて行く。はやては目を細めると、行く手の夜空を仰いだ。白い星が数える程だが見れ始めている。

「そんで三者面談飛び出して来たら世話無いわあ。」

嘯くと、なのはのローキックがふくらはぎを打った。

髪の毛を焼き千切り、こめかみを射撃魔法が駆け抜けた。紫の閃光が壁面に穴を穿ち、コンクリート片を降らせる。

<< Blitz action.>>

フェイトは一足でビルの二階程に飛び上がり、壁面を蹴って魔法の放たれた影へと肉薄する。人の背丈程に積まれたケースとビルに挟まれて、相手の姿は視認出来ない。ならば飛び越えるまでだ。

「管理局だ！ 今すぐ投降しろ！」

声を張り上げケースを飛び越えた瞬間、暗闇から魔力光が三つ閃いた。頭を下げ、一つは左腕の箆手でたたき落とす。もう一つは逸れた。殺傷設定だ、左腕が痺れる。だが、確認することなくフェイトは、バルディッシュを振りかぶった。

<< Harken mode.>>

金属音を響かせて、金色の刃が出現する。新たな光源に彼女の姿が照らし出される。排水管の隣に立ち、彼女は杖を真横に振るった。その軌跡から同じ魔法が現れる。

「はぁっ！」

咆哮を上げ、フェイトは雷撃を纏った鎌を一閃した。瞬間、軌道制御させた刃が打ち出され、五つの射撃魔法を破壊する。爆煙で視野が塞がり、残る三つの軌道が消える。フェイトは左腕を翳した。壊れた箆手の間から、手の甲が覗いている。

<< Diffenser.>>

背後と上下の障壁面を爆発が襲った。衝撃に視界がぶれる。は、と息を吐いた瞬間、魔力流が視野を埋めた。

「——っく、」

魔力が否応無く放出される。全方位防御をする魔法は、一点からの砲撃を防ぐのに適していない。急激な魔力の喪失が、手指に寒気を走らせる。だが、このまま防戦に徹する訳にはいかない。

<< Load cartridge.>>

弾倉から弾薬をデバイス内へと叩き込み、フェイトは障壁を爆破した。砲撃と爆発が打ち消し合う刹那、高速機動で下へと体を逸らし、射撃魔法を解き放つ。彼女は通りを一つ挟んで後退している。

<< Plasma lancer.>>

直進性を重視した魔法が先行して空を駆る。砲撃魔法を今解除した彼女の防御は間に合わない。彼女の長い黒髪が振り返る顔に合わせて翻った。

「——」

声は、物陰から響いた。

甲高いその声は、フェイトの死角、乱雑に積まれた荷物の後ろから飛び出した。一人の子供が駆け出した。九つかその程度だろう小さな男の子は、彼女までのたった一メートルの距離を全力で走る。

「えっ。」

フェイトの声は遅かった。魔法を止める、その意志決定は遅く、その伝搬は遅く。両腕を開き男の子は彼女の前に飛び

出した。

榛の目が、フェイトを見つめた。

炸裂音が三発、響き渡った。男の子の胸と腹部に、金色の矢が突き立って弾けた。男の子の体がそのまま、彼女の体に崩れ落ちる。彼女の手から、杖が落ちた。

「……えっ？」

巻き込んだ？ 背中を走った悪寒に、フェイトは微かに首を振った。違う、こんな時間に子供がこんな場所にはいない。飛び出す理由も無い。それに、さっきあの男の子が叫んだ言葉は、

服が風に翻った。フェイトはその場にゆらゆらと着地する。強くなった日差しが一層路地に落ちる陰を濃くしている。数歩後ろに伸びる通りから差す光が、フェイトの背を焼いた。

暗がりの中、彼女が男の子を地面に下ろす。非殺傷設定の魔法でも、意識を奪うのは容易い。男の子の体は力が抜け切り、人形みたいだった。

「あ、……あ。」

唇から変な音が漏れる。その時、頭の中で電子音が一つ響いた。脳裏に、聞き馴染んだ声が流れる。

『執務官、第34管理外世界に三名追いついた。そっちの場所と状況を報告しろ。子供が一人足りないらしいんだ。聞いているのか！ 返事しろ！』

彼女が、緩慢な動作で立ち上がった。手には何も持たず、

横たわる男の子の脇を通り、ゆっくり歩いて来る。フェイトだけをただ一点、見据えて。

「どうして……。」

転がり落ちたのは、それだけだった。

彼女がフェイトの目の前に立つ。まだ背が低くって、フェイトの頭は彼女の肩の辺りまでしかなかった。見下ろす黒い双眸に差し込む物はない。

彼女の右の拳が、フェイトの顔面を殴り飛ばした。

後ろに吹き飛ばされて、フェイトの体は交差する道へと転がり出る。水溜まりに突っ込んで水飛沫を上げて、でも頬は痛まない。バリアジャケットが守ってくれているから。

ぬるい泥水が頬を滴り落ちて行く。フェイトは手を握り、顔を上げた。左手の方、地平の彼方。太陽が散らばる雲の合間に光っていた。濁った水溜まりの表面にも空が、忘れな草の色で輝いている。

夜景はまるで、星空を模しているみたいだ。漆黒の中に黄色い光が無数に灯って、時折瞬いている。互いに照らし合つて、人の行く手を教えてくれる所まで同じだ。

ベランダの手摺に寄りかかるフェイトの体を、湿った風が撫でる。海の匂いが微かにした。シャツ一枚の体を、冷めた腕が触れて行く。背筋が震えそうになるのを、フェイトは煙草の箱を握り潰して止めた。半分程しか入っていない、紙の煙草だ。表紙には見たことの無い言語が書かれている。唇を結ぶと、フェイトは手摺に組んだ腕に、顎を乗せた。左手を流れる太い川に沿つて、車が一台走つて行く。遠くに掛かるアーチ状の橋へと向かつているのだろうか。

月は二つ出ている。どちらも細く、真つ白い光を高めから降らせ、雲の黒さを際立たせる。まるで道だ。誰が歩けるのかはわからないけれど。腕に顔を埋めて、フェイトは目を細めた。眼窩は乾いていて、ほんのわずか夜景が鮮明になる。

部屋から、チャイムが鳴り響いた。ガラス越しに伝わった音に、フェイトは一瞥をくれる。この時間に、わざわざ尋ねて来る人が思い浮かばなかった。引き継ぎの問題だったら直接連絡がある筈だ。尋ねて来るとは考え難い。

考えているうちに、もう一度チャイムが鳴った。テーブルとクロゼット、一台のベッドがあるきりの暗い部屋には、ドアから一筋の光が漏れている。

「フェイトちゃん！ 寝ちゃったのー？」

ドアを叩く音と声が、聞こえた。

「留守なら留守って言うてやー。」

続いて響いたやる気の欠いた声も、そう。

「なのは、はやて？」

え、つと顔を歪めると、ドアノブが音を立てた。そして、なのはが呟くのが漏れ聞こえた。

「あ、開いた。」

「不用心なやつちゃんあー。」

呆れ果てたようなはやての言葉に、ビニル袋の擦れ合う囁きが被る。

「おじやましーす。わ、真つ暗。フェイトちゃんん？」

ドアが開き、廊下の明かりが室内に差し込んだ。床とベッドを四角く橙色の明かりが切り取り、そこだけ色彩が戻る。

「ちよ、こんな勝手に入つてええの？」

「なんか私、妙にはらはらしてきたわ。」

気兼ねない様子なのはと、その一歩後ろを背中を丸めたはやてが部屋に入つて来る。二人とも何故か中学校の制服で、指定鞆まで持つていて、そのうへはやての手には見慣れたコンピニの袋があった。なのはは部屋を見渡して、ベッドの上に掲げられた黒い制服を見つけた。その顔が、ベランダへと向く。

「あ、フェイトちゃん！」

居るなら居るって言うてよー！！

人懐っこく顔を綻ばせて、なのはがベランダへと駆け出した。途中で鞆を床に置くのも忘れない。はやては肩で息を吐くと、入り口横の台に鞆とコンピニの袋を置いた。なのはが開いた窓から、空気が流れ込んで来る。

「あ、うん・・・ごめん。」

困っているのか呆気にとられているのか、判別の付かない調子でフェイトが答える。はやてが入り口を後ろ手に閉めると、月明かりの方が強くなって窓の形に青く陰が出来た。長く臙な人影が、ペランダの隅に寄る。もう一つはその隣に収まって、隙間を通り抜ける月明かりが消えた。

「もー、なんでこんなに暗くしてるの？」

居ないのかと思ったよ。」

拗ねた声音は幼く聞こえ、はやては僅かに頬を緩めた。甘えてるのかな、なんて思うと自然と笑ってしまう。一つになった影を避けて、自分もゆっくりペランダへ向かった。

「あ、えっと・・・なんとなく？」

金色の髪が風に広がった。リボンを解いていると、髪の色を改めて認識する。月明かりが豊かな髪を梳く。

「それより、なんで二人とも居るの？」

それによって・・・制服なの？」

なのは反対側に頭を覗かせたはやてへも顔を巡らせて、フェイトは首を捻った。

「あー、それはやね、なのはちゃんから聞いて欲しいな。」

手摺の上に腕を組み、その上に顔を載つけて、はやては疲れたように吐き出した。え、とフェイトがなのはを振り返ると、なのはは左手で手摺を握り、右手は拳を握って、力強く言い放った。

「フェイトちゃんに会いたかったから来ました！」

眉間に皺まで作って宣言したのは、フェイトは頭の上

に疑問符を飛ばした。

「え、あ、うん・・・ありがどう？」

するとはやてが「ぷ。」と吹き出した。

「ほんまはねえ、三者面談でお母さんと喧嘩して、逃げ出して来たんやでー。不良娘やんなあ。」

「ちょっとはやてちゃん、余計なこと言わないでよ！」

へいへい、とはやてが返す。フェイトははやての背中となのはの顔を見比べた。気まずそうなのはが眉根を寄せるのを見ると、はやてが言ったのは本当のようだった。

「なのは、お母さんとちゃんと話し合って決めるんじゃないのか？ あんまり心配かけちゃダメだよ。」

厳しくフェイトに言われると、なのはは僅かに視線を逸らした。

「判ってるよ。ちゃんとお母さんにも連絡して出て来たし。」

ただ、今は少し距離が欲しいだけ。」

車の排気音が遠吠えのように夜空を掠めた。フェイトはそっか、と短く呟くと、顔を街並へと向けた。腕の中に半ばまで顔を埋めて、はやてはその横顔を盗み見る。青白い月明かりに晒された横顔は整って、微かにも陰は滲んでいないように見えた。ずっと同じ、無口で優しい顔のままだ。

「フェイトちゃんは三者面談、もう終わったん？」

E組は明後日まであるんやっけ？」

ミッドチルダはそろそろ春を向かえる。鼻先を掠める夜風にすら、草木の青い香りが混じっている。けれど、少し肌寒くて、はやては体を小さくした。

「うん、そうだよ。私は明後日の最後なんだ。」

穏やかに紡がれるフェイトの声は綺麗だ。高すぎず嫌みが無く、すっと耳に馴染む気がする。

「三者面談って、何の話をみんなしたの？」

「やっぱ成績とか、進路？」

三人の身長は並んでしまえば殆ど変わらない。覗き込んで来るフェイトの丸い目を見返すと、はやては肩を竦めてみせた。そうして、眉間に断崖絶壁を作り上げているのはへと視線をくれる。

「何訊かれたんやっけー、なのはちやーん。」

なのは手摺に額を押し付けた。金属製の丸い手摺になのは顔が歪んで映る。

「中卒で就職して何がしたいのー、とか。」

「あなたは何になりたいのー、とかだよねえー。」

「あああ、と今日何度目か知れないでつかいため息とともに、なのは背中から空気が抜けてしぼんでいく。はやてはくすくすと笑った。

「なのはちゃん、そこで三者面談ぶつちぎって出て来ちゃったんやっけ。困ったもんやねー。」

からかうようにひらひら手を振ると、唇を尖らせたなのはが鬼の形相で振り返った。「わあ、恐いわあ。」ふざけた調子でそう口走り、はやてはフェイトを仰いだ。

「何処か街並を、フェイトは見ていた。」

「何に、」

唇が僅かに震えた。

その表情をなんと表現するのか、はやてには判らなかつた。あ、とただ一声だけが胸の中に現れて潰えていく。思わず顔を逸らすと、目が虚空を彷徨った。

「そうだ。フェイトちゃん、今日お仕事だいぶ伸びたみたいだったけど、大丈夫？ 上手くいった？」

なのは手がフェイトの前髪に伸びた。なのは眉根を寄せて、気遣わしげにフェイトを見つめた。

「髪、少し濡れてるね。」

「ちゃんと乾かさないと風邪引いちやうよ。」

左手の指が金糸を絡める。指に巻き付けられた自分の髪を一瞥すると、フェイトは口許を和らげた。月明かりを零すように、金の睫が瞬く。

「うん、ちゃんと捕まえられたよ。」

「なのはの指が一筋、髪を撫でて離れた。」

「流石、フェイトちゃんだね。よかった。」

「なのはの明るい声が跳ねる。はやてもまた、同じように頷いた。」

「怪我もしてへんみたいやし。」

「長引いとるとやっぱ、心配やから。」

風にはやての前髪は吹き上げられて、弧を描く眉が露になる。黒い瞳には街の灯が幾つも点つて、潤んだように揺れていた。

「うん。」

フェイトは笑って答えた。手の中で、煙草が潰れた。

「よーし、じゃあ本日のお菓子パーティを始めます！」



ベランダの外に両腕を伸ばして、なのはが嬉しそうに叫んだ。はやてはへいへい、と応じると、ガラス戸へと手を掛ける。

「え、おかしパーティー？」

きよとんと目を丸くするフェイトに、はやては両掌を空に向けた。

「どこぞの高町なのはさんが、こういう時はお菓子を食べて、みんなであーっとはしゃぐのが一番だよ！ って。」

はやてとフェイトが顔を向けると、なのはな握り拳を作つて、左腕を高々と掲げた。

「一番だよ！」

こらえきれないとばかりにはやてが笑い出すと、なのはもつられて笑い声を立てた。フェイトは目を、細めた。

軽い音を立ててガラス戸が開く。

「電気どこやったっけ。」

眩しながらはやてが室内に入つて行く。なのはも棧を跨いで、フェイトを手招きする。

「ほらフェイトちゃんも。」

「うん。」

フェイトが頷くと、なのはも部屋に戻つて行く。その後ろ姿を、フェイトは立ち尽くしたままで眺めた。

私達は互いに、何処まで解り合っているのだろうか。

コンビニの袋を持ち上げて、はやてはそんなことを思う。

メルティーキッスとマカダミアナッツチョコレートとフラン

と、プリングルズのサワークリーム&オニオンと、ミルク味のあめが一袋入ったビニル袋は軽い。

何にも負けない人になりたいと言いつつたなのはの眼差しを、何に、と呟いたフェイトの言葉を、その横顔の、何を何

処まで自分は解っているのだろうか。互いにその淵を知っているだろうか、と。私達の間にある距離は、わからない。

『あなた、フェイトのこと好きなの？』

いつかそう、はやてに尋ねたアリスの言葉が今も、耳の奥に木霊している。

「あ、そういえば、飲み物買って来るの忘れたね。

なんかお茶とか置いてあったっけ。」

なのはがそう言いながらはやての隣を通り過ぎて、棚の方へと歩いて行く。

「さあ、あったっけ、そんなん。」

答えながらはやては、なのはの後ろ姿を見つめた。制服を着て背筋を伸ばし、なのはは歩いている。

違う、とその言葉をはやては胸中に深く落とす。違うんだ。

諦めている訳じゃない。わかつてはただけなんだ。彼女が車止めを超えて自分を呼んでくれたのだから、無意識から彼女が優しいからだ。そして自分は、それを見つめているだけだ。

いい。その距離だけは、わかつてはいる。

「お茶はっけーん。」

あんまおいしくない奴だけど、いいよね。」

戸棚の中からティーバックの箱を見つけ、なのはが戻つて来る。サイドテーブルには電気ケトルが置いてあり、ユニッ

トバスに併設された水道は飲用だ。なのははお茶の箱を置く  
と代わりに電気ケトルを持って、ユニットバスに上がり込む。  
きつちり靴も脱いで行く。

「おお、律儀。」

はやては感心し、お菓子をベッドの上に広げた。なのはは  
「当たり前だよ。」と返事をする。と、蛇口の下に電気ケトル  
をねじ込む。あまりこういう使われ方を想定していない為だ  
ろう、蛇口は短く、水道台も小さい為に斜めにしか入らな  
かった。感電が心配だなあ、なんて思いながら、なのは蛇口を  
捻った。鈍い音が天井の方から響いて、水が流れ出す。

お母さんとは前の晩から喧嘩していた。進学も考えなさい  
というお母さんと、進学なんて考えない管理局に行くの一点  
張りのなのはの話はずっと平行線だった。我慢強く何ヶ月も  
続けて来たのと同じように、管理局で働きたいことを伝えて、  
それでも昨日は駄目だった。だから、三者面談には来てくれ  
ないと、思っていた。

なのはは水道を止めると。水をこぼさないように電気ケト  
ルを水道台から引き出した。重くなったケトルを胸に抱えて、  
薄暗いバスルームを出る。フェイトが少し使ったのか、タイ  
ルは少し濡れ、土が僅かに落ちていた。

「あれ、電気は・・・まあ、もういつかあ。」

はやてが電気のスイッチも探さずお菓子の袋を開けている  
のを見て取ると、なのはは気が抜けたように肩を落とした。

星明かりと街灯で、物の形を見るには困らない。どん、と鈍  
い音を立てて電気ケトルを通電用の台に乗せると、なのはは

把手についたスイッチを押した。途端に空気漏れでもしてい  
るような音が響く。

「あれ、フェイトちゃん、まだ外に居たの？」

なのはは濡れた手をばたばたと振ると、ティーバッグの箱  
に手を掛けた。40個入りの箱は開けるとまだ半分以上残っ  
ている。

「うん、もう少し、眺めてようかと思って。」

フェイトは手摺に寄りかかったまま、そう答えた。耳が冷  
えて微かに痛む。射撃魔法を殴りつけた左手首にもまだ、痺  
れが残っている。けれど、左頬だけは痛まなかった。

彼女はすぐに後から追いついて来た管理局員に取り押さえ  
られた。男の子も保護されて、一時間と待たずに病院内で目  
を覚ましたとの報告も受けた。深追いこそ責められたものの、  
人の少ない時間帯と場所を選んで行動していた為か、フェイ  
トの行動も特に問題視されることはなかった。

「やっぱり、チョコレートばかり買過ぎたかなあ。」

もうちよつとしようばいもの欲しくあらへん？

スルメとか、チー鱈とか。」

作戦はおおむね成功だった。どの子供も病院や管理局に保  
護されて、安穩な夜を向かえようとしている筈だ。フェイト  
は手の平を開き、握り潰してしまつた煙草を見下ろした。茶  
色の葉が数枚、指にこびり付いている。フェイトを殴りつけ  
たとき、彼女が落とした煙草だ。

「はやてちゃんじじくさい。」

「にやにおう！」

なのはとはやてがベッドの上で言い合っている。フェイトはふ、と息を零すと、夜空を仰いだ。都市部の明かりに紛れて、幾つか星が瞬いている。南部で育ったフェイトには、一つしか星の名前は解らない。北極の丁度真上にあるという星だ。川上の方、四角形を作る星の連なりの先に、薄青く輝いている。

「あ、お湯沸いた。」

なのはそういうと、ベッドから立ち上がって自動で通電を止めたケトルの元へ向かう。いつの間にか用意したカップにはティーバッグが一つずつ入り、糸を机の上に垂らしていた。その一つ一つへなのははお湯を注ぐ。湯気が立ち上り、色がティーバッグから滲み出すのを認めると、なのはは足元に置いた自分の鞆を開いた。中から引き出したのは、携帯電話だ。三つ星が連なったストラップが揺れて、サブディスプレイの零す緑の光を反射させる。

なのはが携帯電話の画面を開き、それをじつと凝視している。それを、フェイトは何故か眺めていた。きつと、お母さんからのメールが入っていたのだろう。

「フェイトちゃん寒くないの？」

「シャツ一枚でそんなずつと外居て。」

「はやてがガラス戸から顔を出した。」

「それとも、天体観測でもしながらやりたいん？」  
「に、と口角を上げてみせたははやてに、フェイトは軽く頷いた。」

「それも、いいかもね。」

「そう言い交わし顔を見合っていると、なのはがカップをはやてに突き出した。」

「はい。フェイトちゃんも。」

「右手に持っていた方を、なのはが腕を伸ばしてくれる。フェイトは開いていた左手を伸ばした。」

「ありがとう。」

「強ばっていた手に、暖かさが鈍く染みて来る。なのはは自分の分を最後手に取ると、両掌に挟んではやてを戸口から押し出し、一緒になってベランダに出て来た。」

「うーん、安っぽい。」

「なのははカップに口を近づけるなり、匂いだけでそうばやいた。はやては息を吹きかけながら、これだから、と言う。」

「実家でいつもおいしい紅茶ばっか飲んでるから。」

「舌が肥えたら終わりやって、偉い人が言うてたで。」

「いいですよ、終わりなら終わりで。」

「自分を挟んで、なのはとはやてが口々に言い合う。フェイトはそんな二人に交互に首を巡らせて、自分のお茶を飲んだ。ほんの少しだけ、草の香りがした。」

「なあ、ミッドチルダって、なんか星座とかあるん？」

「はやてがちびちびとお茶を舐めながら、星空を指差した。」

「あ、私も知りました。」

「アルフさんみたいな狼座とか、やっぱりあるの？」

「左右から浴びせられる期待の眼差しに、フェイトはカップに視線を落とした。そうして川上を振り仰ぐ。街並の上にした一つ、青い星がある。」

「川の上の方、青い星が見えるよな。」

あれが海鳴でいうのと同じ、北極星だよ。」

「こっちは少し、北からずれることもあるけど。」

なのはとはやてが身を乗り出して空を見上げた。二つの月の間、空が一番暗い所に、一点青い星が輝いている。

「へえ、あれが！ 知らなかったなあー！」

はやてが指で指し示す星をなのほも追いかける。

「あ。あれ？」

「あ。あれ？ 明るいね、一等星かな！」

すぐに見つけて、なのほが歓声をあげた。

「春に見える星では、一番明るいんだって。私はもっと南に住んでたから、ここから見える星の名前は、他にわからないんだけど。」

へえ、そうなんだあ、ときりに頷くなのほはじつと、その青い星を見つめている。フェイトはぬるくなり始めたお茶を飲み干すと、カップを置きに部屋に入った。自分の影が床に刻まれている。朧な月明かりで形を失った、のっぺりとした影だ。フェイトはその影を踏んで歩いた。

彼女は、何を怒ったのだろうか。

そもそも、怒っていたのだろうか。その問いが、体中をぐるぐる巡っている。だって、彼女は今までたくさんの人も子供も傷つけて来たのに、どうして、今更。あの男の子だって、他の子と変わらないような扱いをして来たのに。

「フェイトちゃん、マカダミアナツツのチョコとって！」

はやての声が背中を叩く。

フェイトは肩越しにはやてを振り返った。

「わかった。」

なのほにどうして、自分の子供だからって、怒るんだ。

フェイトはサイドテーブルにカップを置いた。ベッドの上には、次元を渡って来たお菓子達が広げられている。その中から言われた通り、マカダミアナツツのチョコレートを取上げて、ベランダへ向き直る。

なのはとはやてが並んで、光の海を眺めていた。瞬く街の光に縁取られ、薄青いシルエットになった二人が少しだけとおくて、フェイトは殊更、笑みを作った。

解ってる。自分の子供は特別だ。桃子が一番に心配するのがなのほのように、はやての両親がはやてが車椅子でも生活出来る家を遺したように、自分の子供は特別だ。リンディだってフェイトを、特別にしてくれている。たった、それだけのことだ。

自分は、母さんの子供じゃなかった、それだけだ。

「フェイトちゃんありがとなー！」

チョコレートを差し出すと、はやてはうれしそうに受け取った。勢い良く中蓋を剥がすはやてに、フェイトは微笑む。「うん。」

「私にも一個ー！」

横手からなのほの腕が伸びて来て、山の形をしたチョコレートを摘んだ。口に入れるとなのはの頬まで溶ける。

「やっぱりマカダミアナツツのチョコはこっちだよ！」

くす、と笑うとフェイトははやての隣に並んだ。いつまで

も握っていた為に、ぼろぼろに崩れた煙草のケースを押し潰す。掌に、僅かな魔力が滲んだ。掌を焼くだけの、僅かな熱だ。

あの男の子は迷うことなく、母親のことを庇った。魔力素養など碌に持たないのに飛び出して。他の子と変わらないような健康状態だったのに、変わらないような抜いだったのに。それでも、母親を庇った。

特別だったんだ。

本物だから。

「やっぱ、日本のチョコが一番だよ。」

ミッドのばっさばさしておいしくあらへんもん。」

私は、母さんのもしもの時に、飛び出せただろうか。飛び出せるだろうか、今。あの時手を伸ばしただけの私が、母さんの為に、飛び出せるのだろうか。

それとも、飛び出す必要は無いのだろうか、本物じゃないから。それとも飛び出せないから、本物にならないのだろうか。なのはだったら飛び出した。はやてだって、そうだ。きつと、アシアも。でもどうせ、母さんは私のことなんて嫌いだっただ、だから、きつと飛び出す必要は無く。飛び出せるわけも無く。

フェイトは唇を噛潰した。痛くてでも、血が滲むまでなんて噛めない。こんな考えなんて馬鹿げているらだって、解っている。どうかしてる、そう思った。

「あ、流れ星！」

なのはが手摺から上半身を乗り出して叫んだ。

「どこや！」

はやてが片足を手摺にかけて応じる。なのはは悪戯っぽく笑うと、舌をべろっと出した。

「うっそー。」

「なんやとー！」

疎らに星が吊り下げられた夜空を、フェイトも振り仰いだ。黒く雲の影が群れ、月の遠さを思い知るような空だった。

フェイトは掌中で壊れた煙草へと魔力を点す。熱が表皮を焼いて、ただそれだけだ。灯火は生まれない。火は点かない。私は、あの子達を笑顔に出来る人になりたい。本物がわからないくせに、本物になれないくせに、そんなことだけを思う。そんな私が、何になれるのだろうか。

こんな考えが馬鹿げているなら、誰か、そう言っただけで嗤って。「フェイトちゃん、チョコ食べないの？」

はい、あーん。」

なのはの上機嫌な声がして、左頬にチョコレートが突き刺される。フェイトはくしゃつと顔を潰すと、口を大きく開いた。